

陳舜臣さんを語る会通信

NO.120 Jun. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年6月10日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

短編集未収録27作を順次紹介いたします/第4回4作、その1「狂った手鉤(てかぎ)」

短編集未収録27作を順次、詳しく紹介しています。本号はその第4回です。前号に続き、初出年の古い順で4作取り上げました。(編集委員 橘雄三)

狂った手鉤

陳 舜 臣
長尾 みのる 画

「狂った手鉤」は『推理ストーリー』一九六七年2月号掲載。カットが四つ入って二十一ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

「舞台・作中時間」

神戸港の弁天浜付近が舞台です。月刊誌の一九六七年2月号掲載ですから、作中時間もその頃です。

「登場人物」

●大江源助 60歳。このほど退職した元刑事。勇退みやげに警部に昇進。神戸の海岸通に住む。再就職口が決まらず時間を持て余している。引退後三週間目に、近所で事件が発生し生気を取り戻す。

妻 病身。寝たり起きたり。

秀子 娘。銀行に勤めている。

●田宮幹夫 若い警部補。福井県の農家の三男坊。大江秀子と恋仲。

●長島ふさ 68歳。弁天浜でアンコと呼ばれる港湾労働者相手にバラック小屋で飲食店をひらいている。守銭奴と噂される。東京に嫁いだ娘がいる。

●内田政子 中突堤にある『泉州堂』の次女、六年生。近所のちびっこの女親分。ふさ婆さんの店から関東煮を盗んだりの悪行や弱い者いじめなども。

●牛尾 神戸駅近くの簡易宿泊所に住む港湾労働者。145cmのチビ。通称、エロ助。性欲変質者の傾向がある。

●笹本耕市 港湾労働者。海岸通のバラックの二階に住む。

喜久子 娘、精薄児。
妻 娘の世話で身をすりへらしたのか、二た月前に死去。

「あらすじ」

長島ふさが、自分の店で脳天をめった打ちにされ殺された。

「凶器は手鉤だな。それでめった打ちしたんだ。…いや、じつにひどい」死体をひと目みて、大江はそう断定した。

※手鉤とは、鷹口に似た港湾労働者の仕事道具。

二人目の犠牲者は内田政子だった。中突堤で発見された。今度も凶器は手鉤だった。一人目との違いと言えば、手鉤の用が一度だったことだ。

三人目が起った。被害者はエロ助の牛尾で、場所は弁天浜に近い、工事中の中央郵便局裏であった。手鉤は、脳天ばかりか背中にもぶち込まれていた。

ここで、大江は、手鉤による連続殺人事件の被害者について、三人とも、精薄児の喜久子によくなかったという共通点を見つけ、娘・秀子を使つてのおとり作戦に打って出る。

こんな描写も



右の挿し絵は、ふさ婆さんのビールの仕入れ風景です。

長島ふさは、夜おそく、よくビールの空瓶を古い乳母車にのせて、小さな飲食店をまわった。客の飲み残したビールを、その空瓶につめて、栓をするのである。そんなふうにして、彼女はほとんど原価なしのビールを何ダースもそろえて、一本七十五円で、アンコたちに提供したのである。

問題点

「精薄児」といったことば、十二歳の少女政子殺害など、現代なら考えられないような作品です。当時は、こんな作品でも受け入れられたのですね。

短編集未収録作品紹介/第4回4作、その2「三つのアリバイ」

漫画読本推理クイズ

三つのアリバイ

伊豆国立公園下田温泉ホテル・ギンギンマン・マンガスライターが描く読本推理クイズ

陳舜臣
画・吉原澄悦

「三つのアリバイ」は『漫画読本』の一九六七年3月号に掲載されました。挿し絵が三つ入って、八ページ弱の短編です。

舞台及び作中時間

【舞台】

東南アジアの新興国の一つ、K国が舞台です。K国の首都D市から車で四時間ほど行くと、K国最大の河川モヒラープ川の河口の漁村モロに着きます。モロから二時間ばかり川を遡ると小部落サリモです。サリモには、この国が植民地であったころ、統治者であるヨーロッパ人が営んだ別荘がいく軒ありました。独立後荒れはてていた別荘の一軒を住める家にして、日本のD市駐在員仲間数人が共同使用していました。その別荘で殺人事件が起きます。

【作中時間】

月刊誌の一九六七年3月号に掲載されました。作中時間もその頃です。



登場人物及びあらすじ

【登場人物】

- 酒井 50歳に近い。阪神物産の駐在員。K国在留八年。共同別荘の不動の会員。最年長。
- 大村 日本の商社駐在員。共同別荘の会員。
- 河野 日本の商社駐在員。共同別荘の会員。
- 岸田 日本の商社駐在員。共同別荘の会員。
- 長谷川 日本の商社駐在員。共同別荘の会員。
- 石原 日本の商社駐在員。共同別荘の会員。
- ナツ D市に住む。太平洋戦争中、この地に駐屯していた日本軍人が、現地の女に生ませた子で、白い膚と黒い瞳を持つ美しい女性。

【あらすじ】

酒井たちの使用する共同別荘で大村が殺された。死因は鈍器による頭蓋骨折だった。

別荘会員は酒井を含めて六人だったが、そのうち一人は香港へ短期間の出張旅行中だった。

「三人のうちの一人にちがいない」

会員のひとり大村が別荘で惨殺されたときい

たとき、酒井は反射的にそう思った。

被害者の大村、香港へ行った河野、それと酒井自身を除くと、残るは岸田、長谷川、石原の三人である。…。

——ナツのせいだ。

酒井はほとんどそう確信していた。

ナツは在留日本人に親近感と好意をもっていた。とくに若くてさわやかな大村には、好意以上のものを示し、大村もそれをうけいれていたようだ。

だが、ほかの若い日本人商社員のなかにも、彼女に熱をあげている者がいた。

酒井は、三人のアリバイをしらべる。

補足及び解決編

「三つのアリバイ」は掲載誌『漫画読本』の推理クイズ作品です。

■「三つのアリバイ」解決編

■前号推理クイズ

「三つのアリバイ」解決編

陳舜臣

自然の法則はいろいろとある。潮汐もそうだ。吸った息は吐き出さねばならぬのとおなじように、満ちた潮は引かねばならない。

犯行の時刻は午後三時、酒井が大村の父に出した手紙によれば、ちょうど満潮だった。

カメラ狂の長谷川はおなじ時刻に、現場から二時間を要する河口にいたという。写真には物の影は認められなかったが、影の長さ以外にも時刻を知る方法はある。

酒井は河口で満潮になれば、水位は河岸すれすれであるとのべている。しかるに長谷川の写真では、水位はずっと低い。漁船が倉庫の岸から縄で籠をおろして、漁獲物を吊りあげてもらいほどこから。その日の満潮の午後三時なら、そんなはずはあるまい。

長谷川は腕時計の針を三時にまわしておいで、アリバイをつくらうとした。背景の河の水位など気にかけなかった。まったくおんぼろアリバイと言うべきであろう。

当選者氏名は二三七頁にあります。

短編集未収録作品紹介/第4回4作、その3「柔道指南の報酬」



「柔道指南の報酬」は『旅』の一九六七年五月号に掲載されました。挿し絵が三つ入って、九ページの短編です。殺人事件は起きません。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

【舞台・作中時間】

掲載誌が『旅』ということもあって、海外が舞台になっています。主たる舞台はイランで、最後、少し、スイスのジュネーブの場面があります。掲載誌の発行が一九六七年五月なので、作中時間もその頃でしょうか。

【登場人物】

●服部茂 30歳。柔道教師としてパリに招聘されたが、その前に半年間の約束で、イランの首都、テヘランで警察官の指導をしてきた。その任期も終りに近づいていた。

●カシム 警官。服部が柔道を指導している一人。

●ファティマ 23歳。バザール街にあるペルシャ絨毯店の店主の姪で、店番を手伝っている。端正な容貌の現代的な女性。フランス語が話せる。

●アリー バザール街に陶器店をもっている。コールマンひげの美男子。ファティマと懇意のよう。

【あらすじ】

服部が、柔道教師として海外へ出る気になったのは、愛に傷ついたからでした。服部は、快活なファティマと話していると、その傷が少しずつ癒やされると感じ、しばしば、バザール街の彼女の店を訪れます。

服部は、バザール街のファティマの店へ行くこととしていて、

顔なじみの若い警官に出会った。彼が柔道の指導をしているグループの一人で、おそろしく体格のいい男である。

「カシム、どうした？一週間も練習に来なかったじゃないか」

服部は片言のペルシャ語でいった。

「忙しいんですよ、先生。宝石泥棒のおかげです。たくさん、たくさん盗まれました」

テヘランでの柔道教師としての任期も終り、イランを離れる直前、服部はペルセポリスとシラスへの自動車旅行を思い立ちます。

服部は、別れに際し、ファティマから、イラン滞在の記念として一枚のぶ厚い皿を贈られます。この皿も事件に絡みます。

自動車旅行の途中、服部は、ペルセポリスが近づいたところで覆面をした四人の男に襲われる。うち二人はピストルを握っていた。

下の挿し絵は、このときの服部の活躍です。



ペルセポリスは、荒野に棄てられた、古代の大化石とでもいうべきであろう。

ここは、アジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸にまたがる領土を支配したペルシャ帝国ハカマヌ（シアケメネス）王朝の都だった。

紀元前三三〇年、マケドニアのアレキサンダー大王に滅ばされたとき、ペルセポリスは焼き払われたのだ。

ペルセポリスの描写はまだ続きます。

これだけ記述すれば、この作品の筋立てなど、概略は見えてきたかと思えます。

あと、作品の最後、スイスのジュネーブでの場面です。

ジュネーブに着いて、ホテル・コンチネンタルにはいったとき、彼（服部）は半年ぶりに意外な人物を、ロビーで見かけた。

「ファティマ！」

そしてもう一人、コールマンひげの美男子アリ。二人は宝石泥棒の一味だったのです。

短編集未収録作品紹介/第4回4作、その4「疾走する青春」

疾走する青春

陳舜臣
え 松田 穂

「疾走する青春」は『週刊読売』の一九六八年5月10日号掲載です。挿絵が四つ入って十ページの短編です。推理小説ではありません。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

「舞台・作中時間」

主人公が出場するオートバイや四輪のレースが行なわれる浅間高原、富士スピードウェイ、鈴鹿サーキットなど、地名、固有名詞は出てきますが、登場人物が生活する町がどこなのか記述がありません。

また、作中時間は、作品掲載年の一九六八年頃なのでしょう。

「登場人物」

●長峰清 有名な彫刻家。

●長峰進一 清の息子。小さい頃から、アトリエで父の仕事を何時間も眺めていたり、庭の隅にしゃがみ、蟻の行列を見ていたりする子供であつた（『隅っこに進一』）。体格がやや小さかつたが病弱というのではなかつた。

小学校高学年になると機械いじりをはじめ、中学に入り、模型の電気機関車は卒業、本物のオートバイが欲しいとねだつたとき、父はよるこんでそれを許し与えた。進一は、やがて、オートバイから更に四輪のレーサーに。

しかし、『隅っこに進一』はレーサーになつてもついでまわつた。

平井昌子の気を惹きたいといつも思っている。

●沼本俊雄 長峰進一の幼稚園時代からの友人。大柄で威勢のよい餓鬼大将だつた。中学、高校と、陸上競技の中距離選手としてはなばなく活躍するようになる。

●平井昌子 先ず沼本と知り合い、長峰進一ともつき合うようになる。二人より一歳下。

「あらすじ」

中学、高校と、進一はオートバイにのめり込んだ。彼の乗り方は、大胆不敵にみえた。『サーカスの進一』とあだ名がつくほど、きわどいコーナリングもマスターした。

高校二年生のとき、進一は友人に誘われて陸上競技の試合をみに行った。沼本俊雄が五千メートルに出場して一等になった。

「カッコいいわー!」隣にいた女子高校生が、手をたたきながら叫んだ。

「そんなにカッコいいかい?」

「そうよ、シビれちゃうわよ」

「きみはシビれるのが好きかい?」

「たまらないわ。ほんとうに生きてるってかんじよ」

「もっとすぐくシビれるものをみせてやろうか?」

女子高校生は名を平井昌子といった。

彼女が美しいというのが、その最大の理由ではない。彼女が沼本俊雄のガールフレンドであり、彼の五千メートル優勝にシビれたということが、進一を奮起させたのである。

進一は浅間高原でのオートレースにエントリーし、昌子を誘った。

その日のレースで、ゴール前数キロというところで、進一はめまいをかんじた。なぜめまい

をかんじたのか? ……

それは逞しい男性にふさわしい舞台だつた。スピードを武器としてつよくなった進一が、強者の道をまっしぐらに進むゲートというべき場所だつた。ところが、ゴール近くになって、あの『隅っこに進一』がひよいと顔をのぞかせたのである。軽いめまいがした。

「まだあいっはおれから離れない」

あいっとは、むかしの自分のことである。

進一はオートバイから四輪に転向したが、レースのヤマ場で顔を出す、むかしの弱い自分、『隅っこに進一』を克服することができずにいた。

そして、もう一つ、いつも心を占めているのは平井昌子のことであつた。さて…。

